

鳴門教育大 ○湯川聰子 石村京子

山陽学園短大 久世直子

目的：公共交通網の貧弱な場合、中年層以下の人々はたとえ経済的な困難はあっても、何とかして免許を取ってマイカーを運転しようとするので、地域が自動車化することからこうむるマイナスは比較的小さい。しかし、高齢者の場合は免許を取得することにも運転することにも困難が大きく、自由に外出のできない層として、日常生活に制約が加わることが多い。本報告は、公共交通網の貧弱な低密度居住地域の高齢者はどのような外出行動上の特徴があり、制約を受けているかを、鳴門市の例によって明らかにしようとした。

方法：鳴門市は昭和63年度にデイサービス・センターを建設し、市内の老人を地区ごとに班編成して専用バスで送迎している。メンバーは登録制を取っており比較的元気で外出意欲のある老人が地区ごとに日が変わりで集まっている。これらの老人に対して予め質問項目を用意した調査表に従って聞き取り調査を行った。調査対象者は合計159人である。

結果：ほとんどの老人が運転免許を持っておらず、徒歩・自転車・バスが利用できる交通手段のすべてであるといつてよい。バス網が貧弱な地区の場合、自転車に乗れるかどうかは重要な要件となるが、女性は乗れない人も多く（男性77%に対して、女性は31%しか乗れない）、行動範囲は狭くなり勝ちである。若い世代と同居の場合も、仕事の邪魔になることへの遠慮から自分の用事のためにマイカーの運転を頼むということは極力避けている。昭和36年に橋がかかるまでは‘離島’であり、今もバスの本数が極端に少ない高島地区の場合は、ほとんど島の中だけの徒歩圏内で老人の日常生活が完結しているが、病院通いだけはマイカーに頼っており、市中心部の老人との生活スタイルの違いがみられる。